

特別展「2013年の自然遊学館の出来事」

場所：貝塚市立自然遊学館多目的室

期間：2014年6月16日～7月13日

2013年の自然遊学館の出来事展を開催するに当たって

1993年（平成5年）10月に建てられた自然遊学館は、2013年が20周年を記念する年でした。自然遊学館はこの20年の間にかなり老朽化が進みました。特に、雨漏りはひどく、天井の雨漏り跡のしみや天井板の剥落等、使用するにも危険が伴う状況でした。また、排煙窓が満足に開かないという不具合もあり、修理の必要性がありました。更に2階レストランは長く未使用であり、厨房の処理等、残された課題はいくつもありました。

2012年に遊学館の改良工事が決まり、20年目の2012年度末（2013年3月）に改修工事が終了し、2階レストランの厨房機器の撤去も終了しました。雨漏りが修理され、雨漏りのしみのついた天井もきれいに張り替えられました。さらに、外壁のタイルや窓ガラスが人の手で丁寧に磨かれ、外観も若返りました。2階レストランは倉庫としてよみがえり、収容スペースとして活用できるようになりました。そんな自然遊学館から特別展『2013年の自然遊学館の出来事』を開催いたします。どうぞ、2013年の出来事展をお楽しみください。その前に自然遊学館の事業について少しお話します。

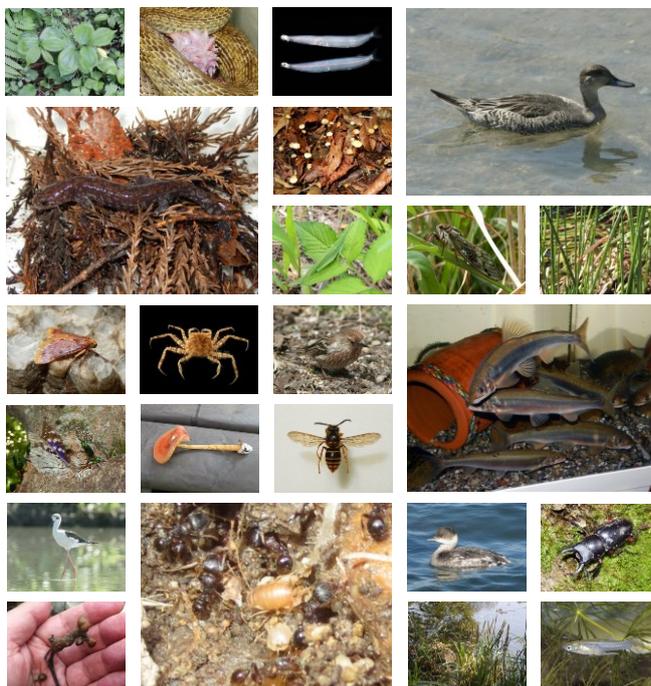
自然遊学館の事業3本柱

1. 観察・調査活動事業

開館当時から続けている貝塚市全体の自然の観察・調査を毎年行い、その結果を季刊誌『自然遊学館だより』や報告書『貝塚の自然』で公表しています。また、遊学館ホームページにも掲載しています。その他に、2012年から新たに近木川汽水域の自然再生事業、『近木川汽水ワンド』の観察・調査を大阪府より委託を受け行っています。この報告は建物入口の展示室にある衝立にて簡単に紹介しています。ご覧ください。

特別展「2013年の自然遊学館の出来事」

～写真と標本で振り返る2013年の貝塚市の自然～



場所：貝塚市立自然遊学館多目的室

期間：2014年6月16日（月）～7月13日（日）まで

火曜日は休館日です

2. 展示・普及活動事業

館内展示の更新、年間行事の計画立案・検討を行い、展示物や貝塚の自然の普及活動を行っています。従来の行事に加え、6月『親子釣り体験』（初心者親子対象）、9月『近木川の鮎調べ』、10月貝塚市立善兵衛ランドとの共催事業『虫と星の観察会』、など新しい行事も人気になっています。他にも、出前授業や観察会への講師派遣、各学校からの団体見学や職場体験の受け入れ等、市民の皆様とともに貝塚の自然を学んでいます。

3. 維持・管理事業

冒頭にお伝えした雨漏り修理と2階倉庫の設置に伴い、1階多目的室（2013年の出来事展会場）がより有効に活用されることになりました。自然遊学館には来館していただいた皆様に驚かすような大きな仕掛けはありませんが、自然に親しみ、自然を大切にする心を育てる仕掛けはたくさんあります。

これからも自然遊学館は、貝塚の自然情報を市民の皆様を提供することを使命とし、市民の皆様の環境教育の場として、自然を楽しむ館として頑張っています。応援よろしくお願ひいたします。最後に『2013年の自然遊学館の出来事展』開催に際し、多くの皆様にご協力をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

2014年6月
貝塚市立自然遊学館
館長 高橋 寛幸

展示会場の様子



展示写真の解説

以下で紹介する出来事と写真は、すべて貝塚市内で撮影されたものです。それぞれの出来事について、タイトル、撮影日、撮影場所、1行コメント、分類群（目と科）、解説文、写真、写真提供者（撮影者名がない写真は自然遊学館の職員が撮影したものです）を示しました。

この報告に掲載した出来事以外にも、貝塚市の自然を把握する上で重要な出来事があり、それらは、本冊子「貝塚の自然第17号」の他の報告や、自然遊学館だより No. 67～No. 70 で紹介しています。自然遊学館だよりのバックナンバーは、自然遊学館ホームページ上で閲覧可能です。よろしければネイチャーレポート、泉州生きもの情報、あるいは寄贈標本のコーナーなどをご覧ください。

サトアリツカコオロギ・・・2013年2月13日、近木川汽水ワンド北側斜面（脇浜）

アリの巣に居候

バッタ目 アリツカコオロギ科

写真の真ん中に写っている小さなコオロギは体長約 2mm ですが、これで立派なメス成虫です。トビイロシワアリの巣にいました。アリの臭いを自分の体にも付けて、臭いでアリに擬態（化学擬態といいます）して、働きアリたちから栄養をもらっているそうです。それに加えて、他の動物に対しても、働きアリが守ってくれるので、アリツカコオロギの方が一方的に得をしているのだと思います。



サトアリツカコオロギ

オオマシコ・・・2013年3月26日、和泉葛城山山頂

2年ぶりに姿を見ました

スズメ目 アトリ科

毎年、冬に和泉葛城山の山頂付近で見られる冬鳥です。でも、2012年は、山頂でお会いした方から「昨日、来ていたよ」という情報はいただいたものの、自然遊学館の調査では見つけることができませんでした。2013年は何とか姿を見ることができ、食野俊男さんに写真を撮影していただきました。これはメス鳥で、オス鳥はもっと赤い色をしています。冬を当地で過ごし、中部地方よりも北の地域で夏を過ごすそうです。



オオマシコ

カサスゲ・・・2013年4月6日、千石荘

菅笠や蓑の材料と言われても

単子葉植物 カヤツリグサ科

植物調査の時、牛神池の岸辺で上久保文貴先生が見つけたものです。かつては水田、水路、ため池にふつうに見られ、菅笠や蓑の材料として利用されていたそうですが、近年、水田や水路の改修や、ため池の埋め立てなどにより、減少しています。菅笠の材料としたことが、和名の由来だそうです。



カサスゲ

チュウシャクシギ・・・2013年5月13日、近木川河口

春に立ち寄る旅鳥

チドリ目 シギ科

貝塚市内では近木川河口付近でだけ確認されています。2008年ごろまでは毎年春に確認されていたのですが、それ以降はあまり見られなくなりました。旅鳥で、春に確認されるのは、冬を熱帯や亜熱帯の南の地方で過ごしてから、夏に寒帯や亜寒帯の北の地方で繁殖するために渡りをする途中に立ち寄ったものです（秋の確認がほとんどないのは、渡りのルートが違うからかもしれません）。大阪府レッドデータブックで準絶滅危惧に指定されています。



チュウシャクシギ
(食野俊男さん撮影)

ベニイトトンボ・・・2013年6月4日、千石荘

黄色は多いのに赤色は少ない

トンボ目 イトトンボ科

千石荘の牛神池では、春から秋にかけて黄色いキイトトンボと黒っぽいクロイトトンボはよく飛んでいます。特にキイトトンボは植物の緑色の背景から目立ちます。でも赤色のベニイトトンボは少ししかいません。月1回程度の調査では、見つからない年もあります。キイトトンボも同じ仲間なのに、この多い少ないの違いは不思議です。大阪府レッドデータブックで準絶滅危惧に指定されています。



ベニイトトンボ
(植物はアンペライ)

* 2014年の大阪府レッドデータブックの改定で、キイトトンボも準絶滅危惧に指定されました。

セダカコブヤハズカミキリ・・・2013年6月6日、大阪湾

飛べないカミキリムシ

コウチュウ目 カミキリムシ科

和泉葛城山や金剛山が産地として知られていましたが、自然遊学館の標本としては初めてとなりました。成虫の第一の特徴は、後翅が退化していて、飛べないということです。ということは地面や落葉落枝などを這うことになり、葉上の目視が主な調査方法では見つかりにくかったわけです。成虫は広葉樹の落葉を摂食するそうですが、この個体で確かめるのを忘れてしまいました。大阪府レッドデータブックで準絶滅危惧に指定されています。



セダカコブヤハズカミキリ

アカハネオンブバッタ・・・2013年6月24日、汽水ワンド北側斜面

バッタ目 100種目は侵入種

バッタ目 オンブバッタ科

早い時期にオンブバッタがいるものだと思って採集しました。展翅標本を作っているとき、バッタ調べの先生である森康貴さんに、オンブバッタではなくアカハネオンブバッタだと教えてもらいました。元々、南西諸島に生息していたものが、最近では大阪湾周辺や大きな河川沿いに見られるようになっていそうです。後翅が赤味がかっているのが特徴で、あとは年に2世代を繰り返すというのが、年に1世代のオンブバッタと違う点です。



アカハネオンブバッタ

オオルリとコサメビタキ・・・2013年6月～7月、蕎原本谷

オオルリ スズメ目ヒタキ科



2013年6月28日 蕎原本谷 佐々木敏夫氏撮影

オオルリ スズメ目ヒタキ科



2013年6月28日 蕎原本谷 佐々木敏夫氏撮影



2013年7月5日 蕎原本谷 佐々木敏夫氏採集・寄贈

雛の巣立ち後、巣を採集し、自然遊学館に寄贈していただきました。



2013年7月5日 蕎原本谷 佐々木敏夫氏採集・寄贈

雛の巣立ち後、巣を採集し、自然遊学館に寄贈していただきました。

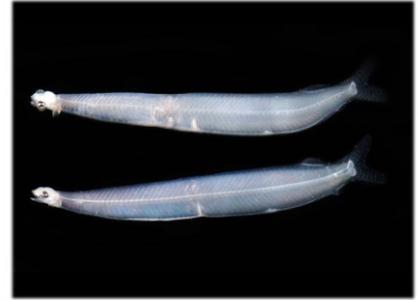
佐々木敏夫さんから、子育て中のオオルリとコサメビタキの写真、および巣立ち後の巣を寄贈していただきました。

カライワシのレプトセファルス・・・2013年7月7日、近木川河口

眼の突出した奇妙な魚

カライワシ目 カライワシ科

生き物採集が大好きな石井さん親子が、近木川の河口でタモ網をガサガサしていると変な魚を2匹捕まえたと、生きたまま館に持って来てくれました。平たく透明で、目の突出した奇妙な姿をした全長約37mmの小さな魚です。お寿司のネタとして見かける“のれそれ”と呼ばれるアナゴ類の仔魚に似ています。調べてみると、これまで大阪湾ではほとんど見つからないカライワシのレプトセファルス（葉形仔魚）でした。どうやら海流に乗って南の海から流れてきたようです。



レプトセファルス

キバナチゴユリ・・・2013年7月17日、蕎原東手川

黄花稚児百合と書くと雰囲気が出ます

単子葉植物 ユリ科（イヌサフラン科）

同属のチゴユリは白い花を付けますが、キバナチゴユリは名前の通り、春から初夏にかけて黄色い花を付けます。森林伐採など生息場所の減少により大阪府レッドデータブックで絶滅危惧Ⅰ類に指定されています。自然遊学館のこれまでの調査では市内で確認されていませんでしたが、石井葉子さんにより東手川で発見され、現在、生息場所の保全を行っています。

石井葉子さんによる情報提供



キバナチゴユリ

アカアシクワガタ・・・2013年8月1日、和泉葛城山山頂

こんなに脚が赤かった？

コウチュウ目 クワガタムシ科

自然遊学館には1992年と1995年のアカアシクワガタの標本がありました。1992年の採集場所は和泉葛城山山頂と馬場、1995年は和泉葛城山山頂でした。当時の和泉葛城山山頂では、ブナの倒木や立ち枯れがもっと多く放置されていて、それを利用するアカアシクワガタはいつでも居場所が分かる存在でした。でも、ブナの倒木も立ち枯れもいずれはなくなるものです。2008年から定期調査を始めてからようやく6年目にして成虫を見ました。裏返して見て、こんなに脚が赤かったのかとびっくりした次第です。



アカアシクワガタ

オオムラサキ・・・2013年8月1日、和泉葛城山山頂

翅の音は鳥のよう

チョウ目 タテハチョウ科

オオムラサキは、自然遊学館の記録では、木積、馬場、柵谷で確認されてきました。でも、死体であったり、幼虫から育てたものであったりして、なかなか野外で生態写真を撮る機会がありませんでした。ようやく和泉葛城山の山頂の樹液で、オス成虫が2個体、なわばり争いをしているところを撮影することができました。撮影後、2個体とも、こちらを威嚇するように飛び去って行きました。その時の翅の音が鳥のように力強く感じられました。



オオムラサキ

エゾゼミ・・・2013年8月1日、和泉葛城山山頂

山頂では健在

カメムシ目 セミ科

貝塚市内では和泉葛城山の山頂付近にしか分布していません。出現時期は8月と9月が中心で、7月下旬や10月上旬に鳴き声を聞くこともあります。鳴き声は特徴的で他のセミと間違えることはないですが、姿はなかなか見ることができません。この日はたまたま樹木の幹ではなく、なぜかススキの葉の上に止まっていました。大阪府レッドデータブックでは準絶滅危惧に指定されていますが、和泉葛城山の山頂付近では毎年安定して鳴き声を聞くことができます。



エゾゼミ

ウスムラサキシマメイガ・・・2013年8月18日、和泉葛城山

蛾の幼虫が肉食？

チョウ目 メイガ科

西小学校の生徒3人がセグロアシナガバチの巣を持ってきました。一人の家の窓枠に付いていて危ないから取ったそうです。自然遊学館で巣を見ていた時、翅の短い蛾が出てきました。すぐにその翅は伸びて、普通の蛾の形になり、ウスムラサキシマメイガだと分かりました。文献で調べると、この蛾の幼虫はセグロアシナガバチの蛹と幼虫を摂食することが分かりました。蛾の幼虫の中で肉食は、かなりの変わり者です。



ウスムラサキシマメイガ

カキのなかま・・・2013年8月21日、近木川河口

ぼくは何もの？

カキ目 イボタガキ科

近木川河口の両岸の護岸には、びっしりとマガキが固着していますが、下部に固着しているものをよ～く観察すると、形がマガキでないものが見つかりました。貝のかみ合わせの部分がギザギザで、開けてみると内側縁に沿って歯が並んでいるのが特徴です。近年の報告では、オハグロガキモドキやニュージーランドガキと呼ばれていますが、いまだきつちりと種名が確定されていないカキです。



カキのなかま

ホシミスジ・・・2013年9月12日、千石荘

千石荘で80種目のチョウを撮影

チョウ目 タテハチョウ科

和泉市、岸和田市、泉佐野市では確認していたので、いずれ貝塚市内でも確認されるだろうと注目し始めてから5年は経ったと思います。千石荘での定期調査の日、コムスジが遠くに飛んでいると思って撮影した画像を自宅で見ると、ホシミスジだったと気づきました。前翅にある横に伸びる白い線がコムスジより細分されているのが特徴です。幼虫の餌植物はユキヤナギやシモツケで、野生のものではなくても公園や民家の庭に植えられています。標本があれば良かったのですが、いちおう自然遊学館の記録で貝塚市80種目のチョウとなりました。



ホシミスジ

クマスズムシ・・・2013年9月12日、千石荘

2001年以来、2度目の確認

バッタ目 コオロギ科

畑や草むらのやや湿った場所にすむ小さなコオロギです。珍しい種ではありませんが、鳴き声も地味だし地面近くで生活しているため、標本が得にくい種です。自然遊学館には貝塚産の標本が1個体しかありません。採集を先にすべきか迷ったのですが、撮影を先にして採集もと欲張ったため、撮影後に逃げられてしまいました。標本は同所で2001年に採集したのがあります。



クマスズムシ

オナガガモ (♂夏羽型)・・・2013年9月18日、近木川下流
渡りをするのを忘れた？

カモ目 カモ科

オナガガモはほぼ毎年、近木川河口で見られる冬鳥です。オスの成鳥の尾が長いのが特徴、かつ名前の由来です。春になると北の地方へ繁殖のために渡りをするはずなのですが、なぜかこのオスは渡りをせずに、夏の間も近木川下流で過ごしたそうです。そのおかげで、珍しい夏羽を見ることができました。

(観察と撮影は食野俊男さんによるものです)



オナガガモ (♂夏羽型)

セイタカシギ・・・2013年9月18日、麻生中

鳥類 189 種目の確認

チドリ目 セイタカシギ科

写真のように脚が長いのが特徴です。とても優雅に見えます。でも優雅に見せるためではなく、干潟や浅瀬で他のサギ、シギ、チドリ類よりも深い場所で餌（エビ、カニ、魚など）を採ることができるといふ利点があります。これまで主に旅鳥として記録される程度だったのが、徐々に確認数が増えているそうです。自然遊学館の記録として、貝塚市産 189 種目となりました。(食野俊男さん撮影)



セイタカシギ

アユ・・・2013年9月22日、近木川下流

近木川にアユ？

キュウリウオ目 キュウリウオ科

河野通浩さんを講師に迎えた「近木川の鮎を調べよう」の行事で確認されました。下見の時には確認できなくて心配したのですが、おそらく行事の前の大雨でアユの群れが登ってきたのだと思います。自然遊学館の記録では2005年と2011年に確認されていますが、いずれも少数個体で、今回のように30個体を超える群れで確認されたのは初めてです。近木川の水がきれいになってきたことも原因だと思われます。その時に採集したアユ2個体を剥製にして、展示しています。



アユ

チゴイワガニ・・・2013年10月17日、汽水ワンド

泥の中からこんにちは！

十脚目 イワガニ科

近木川河口に2012年秋に完成した干潟再生地(汽水ワンド)に溜まったぬかるんだ泥をタモ網で振るっていると、甲羅の大きさが5mmにも満たない小さなカニが姿を現しました。一見すると近木川でもよく目にするモクズガニの稚ガニと見間違えませんが、甲羅の横の棘の形などが異なっています。国内でも記録されている地域が限られており、貝塚市では初記録になりました。



チゴイワガニ

ウスキブナノミタケ・・・2013年10月29日、和泉葛城山山頂

ブナも大変だ

ハラタケ目 キシメジ科

定期的に行っている山頂の鳥調査の時に、同行した食野俊男さんがブナの林床に見つけたクヌギタケ属の薄黄色のキノコです。クヌギタケの仲間は同定が難しいなと思いながら引き抜くと、先にブナの実(堅果)が付いていました。それでウスキブナノミタケと同定できました。このブナの堅果はその年の秋に成ったものではなく、前年の秋に成ったものです。たいていのブナの堅果はブナヒメシンクイ(ハマキガ科)に食害されていて発芽しません。その上、このようなキノコも寄生するので、ブナも大変です。



ウスキブナノミタケ

ハジロカイツブリ・・・2013年11月26日、近木川河口

久々の発見

カイツブリ目 カイツブリ科

2002年以来続けられてきた近木川河口付近の定期調査では確認されていない種です。創館10周年記念の貝塚市の動植物リストでは、2000年の和田岳さんによる記録がありました。目が赤いことと、くちばしが反り返っていることが特徴です。



ハジロカイツブリ
(食野俊男さん撮影)

コガタブチサンショウウオ・・・2013年12月7日、近木川本谷

近木川源流探検行事で発見

有尾目 サンショウウオ科

近木川源流探検の行事の日、本谷の源流に行った帰り、標高約600m付近の山道で、参加者の丸山ひよりさんが石をひっくり返すと、コガタブチサンショウウオがいました。自然遊学館の記録として8個体目となりました。現在、館内で飼育しています。上流の冷涼な環境に似せるため、水温の低い上流水槽の中に飼育ケースをセットしています。行事の日には標高約470m付近の山道脇の倒木下でもう1匹見つけました（同9個体目）。いずれも冬眠場所にいたものと思われます。



コガタブチサンショウウオ

アオダイショウのヘミペニス・・・2013年12月27日

自然遊学館内で飼育

ヘビから変なものが出てる

ヘビ亜目 ナミヘビ科

年末の休みに入る2日前に来館されたハタノ兄弟が、飼育展示しているアオダイショウの胴体から変なものが出ていることに気付いて、事務所にいた職員に知らせてくれました。その後、年末年始の休みの間もどんと膨らんでいきました。大阪自然史博物館の和田岳学芸員に聞くと、これは1対あるヘミペニスの片側が腫れたものだと教えてもらいました。なぜ腫れたのか原因は不明です。その後、西澤真樹子さんの手当てで、ヘミペニスの腫れが引き、現在は元気になっています。



アオダイショウのヘミペニス

ヘミペニス：ヘビやトカゲの仲間はオスの総排泄腔（尿と糞の両方をだすところ）の中に、（尿と糞の両方を出すところ）の中に袋状のヘミペニスを左右に1個ずつ、計2個持っていて、どちらかを膨らませてメスの総排泄腔に入れ、交尾します。

以上、自然遊学館の2013年の出来事展において展示した写真の紹介をさせていただきました。その他、改修工事や行事の写真、特別展ポスター、自然遊学館だより目次、20周年記念イベントの報告などを展示しました。